

その男、始皇帝

$\Psi(\omega; \omega; *)$

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて中国を統一した始まりの王様が居た。

その王様の名は始皇帝、またの名を——・・・政（えいせい）。

彼が戦乙女に出会わず転生していたら、そんな世界線の話。

『朕の進む道それすなわち道也』

ハイキュー[×]!!終末のワルキューレ（登場人物は始皇帝のみ）

※オリ主とボーイズラブは念の為

目次

始皇帝、バレーの道へ進む	1
始皇帝、後輩ができる	4
始皇帝、設定及びプロフィール	7
誰かの想像を越える、始皇帝	10

始皇帝、バレエの道へ進む

西暦1995年2月18日、日本の東京のとある某区に一人の男児が産まれる。

その赤子の名は☒政(えいせい)、本来は死後ワルキューレ(半神半人)に天界へと連れていかれる手筈で有った。

しかし何の因果か☒政は輪廻の輪へ入り転生を果たす。

それも三度目の。

同じ人生を二度も歩み、同じ道に進むと信じていた。

どれだけ上手くやろうとも何らかの修正の力が働き結果同じ道を歩むこととなっていたのだ、そう思っても致し方ないだろう。

しかし、ここで奇跡が起きた。

次の人生ではバレエで始皇帝になれでも言うのか。

全く別の道が開かれ、新しい時代へと導かれ今に至る。

そして幸いな事に天賦の才が「朕」にはあった。

物心が着く頃には両親とバレエを始めており小学生へ上がる頃にはその辺の子らよりも頭三つ程抜け出ていた程。

だからと言い慢心等出来る筈も無し。

このボールを落とさないという競技は中々に興味を唆られそれに関わらぬ人生は今世では考えられない。

どれだけ鍛錬したとしても足りない。

出来ることなら四六時中、夢の中でもしていたいものだ。

バレエに夢中な日々を送るとある日、両親はこう告げた。

仕事の都合で兵庫へと引越すと。

仕方がないがやはり仲良くしてくれていた彼にはきちんと別れを告げなければならぬ。

今世で初めての友達であり幼馴染みの京治に。

朕の方が一つ上ではあるものの話を合わせてくれており共に楽しくバレエをした仲なのだ。

言わぬ訳にはいくまい。

「引越す事となった」

「そっか・・・え!?引つ越す?ど、何処に?」

「関西圏の兵庫の確か稲荷何とかと言っていた」

「・・・遠くなるね。手紙書くよ。バレーは続けるんでしょ?それならまた会えるだろうし☒政なら何処でもやって行けそうだし心配はしてないけど我が道を行くスタイルは控えた方がいいよ」

「あっはっは!朕が進む先は道となる。今更控える?無理な話だ。バレーは当然続ける。後朕も手紙を送ろう」

「言うと思った。今日はバレーしてく?」

「否、今日出発するらしい!だから最後のお別れをと寄つたまでだ」

「・・・☒政も大概だけど両親も大概だよ。多分今後の人生で驚く事少なくなると思うよ。元気でね」

「好!京治も元気でな」

こうして別れを告げいざ兵庫へ。

飛行機の中は暇でボールを抱えながら窓の外を覗いているといつの間にか夢の中。

目覚めた時には新しい家の中であつた。

父が抱っこをして運んでくれたのであろう。

ボールを手放さず抱えて眠っていた様子を考えるとそれが妥当か。

起きてすぐ腹がなり母は笑いキッチンへ夕食の準備を始め父は朕と共にリビングへと足を運ぶ。

今の家庭は暖かくいい家庭だと伺える。

幸せとはこういう事なのだろうな。

春燕・・・朕はやつと血の繋がりのある家族と食事を取り愛され楽しく過ごすことが出来た。

これも春燕のお陰なのであろう。

あの時心を救ってもらったからこそ正しく生きられる。

この事は今の両親は知らぬだろうがどうでもいい。

感謝している、受け入れてくれていたことも愛してくれている事も全て。

だから恩返しをしたい。

バレーという競技で有名になって。

再び『始皇帝』の名を手に入れ両親に感謝の意を伝える。
それが今の目標である。

始皇帝、後輩ができる

何度目かの春を迎え現在中学二年生となり部活で初めての後輩というものが現れる。

その後輩達はアランの知り合いで名を侑と治という。

他にもチラホラと後輩は居ったが印象深かったのがこの二人で双子というだけあり顔がそっくりであった。

性格や声は全く違い判別は容易く間違う事は無い。

そんな双子は毎回喧嘩している、気が付けば。

見ている分には愉快で良いのだがアランは世話焼きなのか止めに入る、周りの人も。

兄弟喧嘩できる程仲が良いのだなと伝えると声を揃えて『誰がコイツ何かと!!真似すんな!』と漫才をする。

やはり仲が良いではないか。

「はっはっは!」

「何わろとんねん!!止めろや」

「続けさせれば良い、実に愉快である」

「見せもんと違いますけど!?!」

「愉快でなんやねん!!」

喧嘩していた筈の双子がこちらにツッコミを入れ一時的にはあるもののそれが収まり怒りも収まった様に思う。

何故かは知らぬ、愉快と口にしただけでこうとは実に不思議だ。

そして部活の監督である先生が此方へ声を掛け皆静まった。

「宮兄弟の喧嘩か?よう止めたな☒政」

と言葉を紡ぐが別に止めたつもりは毛頭ない。

「推奨した筈なのに止まった」

「いや、推奨してたんかい!!そこは止めたれや。普通に止めても止まらん奴等やけども」

「ほれ、もっと喧嘩して良いぞ」

「いや、それ冷静になるやつやん。無理難題せんといってもらて」

「☒政くん変わりもんやからしやーないな。喧嘩せえへんけど」

「俺からしたらお前等も政も同じ穴の貉やで」

「はいはい！私語はそこまでや。練習するで」

その鶴の一声で気持ちを切り替え練習へと移り数時間が経過した。何度目かのチャイムが鳴り終え下校の時間となりそれぞれ解散となった。

奇遇にも双子達と家が近く一緒に帰る事となったのだが。

寄り道してこうと提案をしてきた。

ウチの中学では買い食いが禁止されては居らぬのでちらほらと生徒を見かける事もある。

一番は家での食事だが当然部活後ともなれば必然的に腹は減る。

食べ盛りの中学生にとっては物足りぬだろうがな。

「政くんは買わんでええんすか？」

「構わぬ家に帰って確りと飯を食う」

「そないな事言うて金欠とちやいます？」

「カードは持つてるが金自体は持ってない故ある意味そうであろうな」

「いや、それ金持ちが言うセリフやないですか！」

「・・・ふむ、そうなのか」

「やっぱ政くんてズレとるわ」

「いやホンマに。そこがおもろいんやけども」

「朕からしてみれば主等の方が面白い」

「いやいやいや」

後輩と呼ぶには双子は少々敬語が足りないがそれでも初めての可愛い後輩。

それと何より楽しませてくれる存在でもありバレーする時の頼もしい仲間でこの学校に通えて光栄だ。

幸いにも親の転勤は暫く無いと申していたので高校まではこの地域で暮らせるとのこと。

それとは関係なく高校は好きな所へ行きなさいとまで言われたがやはりバレー強豪校は外せない。

この後輩達ともう暫くバレーが出来そうな環境と言えば一択。

『稲荷崎』

しかない、が。

幼馴染みとのバレーも好きだった。

東京で再び彼とバレーするのも悪くない。

手紙によると進学先は既に決まっているのだとか。

流石朕と幼馴染みなだけある、確か……。

『梟谷』

と、書いてあった。

実に悩ましいがどちらかと言えば幼馴染みとは一緒によりも対戦者として戦いたい。

よって進学先は稲荷崎に決定。

必ずしも双子がその学校へ来るとは限らんが確信している。

県内トップレベルならず全国トップレベルの強豪に双子が興味を惹かれぬ筈がない、と。

寄り道の店で未来を思いほくそ笑む朕に気付かぬ二人を眺めつつ会計を終えるのを待ち家へと帰宅。

その足取りは実に軽かった。

まあ、重い事等一度も有りはしないのだが。

始皇帝、設定及びプロフィール

主人公↓劉 ㊦政（りゅう えいせい）

今の両親の苗字が劉で名前が『㊦政』となった。

1995年2月18日、日本東京のとある某区に爆誕。

三度転生（内1回は戦乙女と共に戦った過去がある）

二度目の転生でもう少し良い人生にすべく奮起するも結果は変わらず人生を終了し三度目の転生へと至った。

容姿は前世と全く同じ。

ただ別の母から産まれたので身体が違う為ミラータッチ共感覚の症状が無く、星も見えることは無い。

その代わりにバレエの才覚が有るとかなんとか。

頭の良いバレエ馬鹿。

割と裕福な家庭に生まれる（家の横に室内用の専用バレエコートがある）

身長↓196cm（高三時）

体重↓88.5kg（高三時）

赤葦と幼馴染みで手紙↓スマホのやり取りをしている程仲は良い。

中学は野狐。

双子の先輩でアランくんと同期。

高校は稲荷崎。

普通の変人。

周りからすれば当然変人だが言葉は通じるし友好的なので友達が多い。

背番号11始皇帝と言う考えでは無く新しさ、楽しさ、強さの方面で常に誰よりも前に立つ者が始皇帝という考え。

別にキャプテンになりたい訳でも無いのでその辺はどうでもいい。

すぐ迷子になる人、そのせいで最終日本代表（19歳以下）には残れない。

迷子になるのにも限界があり㊦政の自由さに引っ張られて他の人

も迷子になったら大変だという上の判断（日本代表候補（19歳以下）には常に入ってる）本人は迷子癖を直そうともしないし至って気にしていない模様。

背番号（中学）↓2（中三時）

背番号（高校）↓3（高三時）

ポジション↓ミドルブロッカー

兄弟構成↓一人っ子

好物↓ビャンビャン麺

役職↓バレーボール部副主将

バレーの実力でのみ副主将になったので殆どお飾り役職、だが士気を高めるのは上手い。

所属↓稲荷崎高校（3年7組）

北と同じクラスなのは☒政が学校内でも直ぐに迷子になるのでその面倒をもらう目的で同じクラスにした、北なら見逃さず時間通りに授業を受けれる。

尚、他の人の場合ちよつとでも目を離すと何処かにふら付いて気付いたら居ない事が殆ど。

辛うじて家と学校の行き来の道は迷子にならずに通える。

所属（中学）↓野狐

最近の悩み↓家で自炊する時両親が後ろから生暖かい目で見守ってくる

スカウトが来ていた高校↓稲荷崎、音駒、梟谷、伊達工業

ジャンプフロッターサーブ、ジャンプスパイクサーブの両刀だが中学以降ジャンプフロを見た者はいない、スパイクサーブ一本で行くと決めたと多くの者が思っている。

真相は化けに化けたジャンプフロをここぞという時に見せたかったから練習試合の時も隠していただけ、それを知っているのは稲荷崎のチームメイトのみ。

変人速攻も難なく合わせられる。

最高の舞台で赤葦と戦う事を約束した。

影響を与えた人↓赤葦京治、宮兄弟

赤葦に初めてバレーを教えた人物でありこの人とバレーがしたい、対戦してみたいと思わせた。尚直ぐに迷子になったり変わった行動を起こしていた☒政が居たので木兎の扱いは普通にこなせていたか。

宮兄弟やアラン達とは中学からの付き合いで兄弟喧嘩を見て茶化そうとするので逆に冷静になることもある。

バレー面に対しては攻めしか頭に無かった当時の双子に衝撃を与えた。

ブロックで点を取る方法も有りなのだ。

サーブにおいて特に侑は何が起こったのか頭を下げてでも教えを乞いた。

侑のジャンフロは☒政のレスペクト(自分のモノにして既に消化済み)

誰かの想像を越える、始皇帝

あの時の光景が今でも忘れられん。

野狐中は関西の中学校でも特にバレーが強い学校として有名で全中にも何度も出場しとる特にこの三年間は特に強い奴等が揃ったというらしいわ。

尾白アラン、宮兄弟そして劉政。

レベルが高いのは重々承知しとったが何処かしら舐めとる姿勢を俺はしとった、いうても中学レベルでの強い程度やと。

スカウトの範囲内の強さやと甘くみとってん。

それが打ち砕かれたのが彼のブロックの技術を目撃した時やった。いつプロに入っても可笑しゆうない、これ程レベルが高いにも関わらず今までどうして注目してこなかったんやろか。

これは最早天才のそれや。

今見とるのでさえレベルが高いちゅーのに小学校ではスポーツ少年団にすら入つとらんとはなあ。

・・・否、安易にそこへ入ってまえば一人だけ浮き大層居心地も悪く居れたもんや無いやろそんなん。

浮いた天才はつまらないという疎外感で辞める場合も多く事例がある。

そうさせへん為に親が配慮したんやろう。

その結果が彼をここまで化かした。

単に才能を見せない為に何もせず歳を重ねるんやなく、ママさんバレーとかに混じってたんとちゃうやろか、知らんけど。

1対1ん時は必ず味方がフォローしややすい位置に誘導・・・つまり相手にとって『打たされる』状況にするって事や。

分かっていたとしてもそれを崩すのは中々に難しい、逆もまた然り。

あれ程の連携を取れるのは彼への信頼があらへんならフォローしたとてファーストタッチがそのまま返球されたり体勢が整わないまま慌ててミスする事も有る。

そもそも拾えん事さえも有り得る、せやけど彼……否、彼等は信じとる。

そこへボールが落ちると、そこで待つてればボールが来ると。

勿論それが外れる事も有り得るし彼等もレベルが高くとも個人的な体力は存在しとる為人によつてミスする事も多少なりともあつたがそれを差し引いてもチームとしてここまで出来上がつとるのは俺は初めて見たわ。

流石にあの白鳥沢には勝てへんかつたがそれでも強かつた。

何より震えた『政』という一人の存在に。

何れバレー界のトップに君臨する。

その彼がどの高校へ入学し活躍するかは分からんが是非ともウチへ来て欲しい。

三年という短い期間ではあるがその成長を見守つてみたい、監督として、バレー関係者として……一人のバレー好きとして。

スカウトせん訳が無い。

「政くん」

「？」

「君ウチへ来んか？俺はこういうものやけど」

試合後名刺を渡す。

他にもスカウトをしていた為順番は遅なつたしこの試合を見るまでは考えも違うかつた、その事を後悔せんでもないが渡さんよりはマシや。

「好！其方からスカウトしてれるとは嬉しい限りだ。宜しく頼む」

渡して早々俺が言うのもなんやけどええんか？早ないか？

秒で返事くれるん彼奴だけやろ。

もうちよい考えてもええやろがい。

即答で。

来てくれる事自体は嬉しいで、戦力としても見守りたい側として
も。

ただな、こつちも早いとこつちが吃驚すんねん。

「ええんか？もつとこつち、悩んだりせんで。スカウトする側が言うん

もなんやけど」

「昨年から決めていた事だ。稲荷崎に入ると」

「成程なあ。それやったら納得や。ほな今後についてはその名刺の番号から電話してや。ご両親とも話しとかなあかん事もあるやろし」

「ふむ、では三日後に連絡させてもらおう。両親が揃うのは早くてもその日なのでな」

「三日後か了解や」

敬語も無く少し偉そうやったが元々そういう性格やな。

人当たりはええしこういう所が人への信頼に繋がったんやろう。

しかしそうか、ウチへ決めてたか。

アカン、顔がニヤけてまう。

吃驚したが嬉しさが勝つとる。

強豪校のウチやけどあれ程の実力なら他からもスカウトは来とる筈やのに意志を変えずにウチに来たいて。

こない嬉しい事は無い。

そうと決まれば他にもスカウトしたい人は何人が居るし出来ることとはしとかな。

これからが楽しみや。

そうして一年の時間が過ぎ今に至る。

「政そっちは体育館と違うで」

「そうなのか。ではこっちな」

「そっちはグラウンドの方や。体育館は向こうやで。ついでやし一緒に行つたるわ」

「おお、有難い。では頼もう」

信介をスカウトして良かったて今では身に染みとる。

迷子が過ぎる彼の面倒を見れるのは彼奴しか居らん。

家から学校までの道は覚えとるのに他の道は全くと言って良い程に迷う。

学校の中とて例外は無い。

最初はわざとかとも思ったが流石に毎日迷つとるので素でそうやと分かった。

中学でも迷子になつとつたらしくアランをなるべく一緒に居させとつたらしいけどそれでも迷子になつとるので彼は道を覚えられんらしい。

家から学校は除く。

来年からは彼奴と彼は同じクラスにしてもらわな他の教師も毎回彼を探すのは大変やろうし。

授業が教室で行われるだけならええけど昼休みや移動教室ん時が問題や。

その点彼奴が居れば一緒にこうしてここまで来れる。

おん、そうするべきやな。

才能のあるモンは何かしら捨てとる事が多いが彼の場合『道を覚える』事を捨てた訳か。

問題児かと問われれば謎やし本人自体は捨てとる自覚はあらへんが。

「☒政、道で迷子はええとしてバレも迷子になったら許さんで」

「うむ！それについては無問題である！」

「調子ええ事いうて」

何はともあれ仲間とバレーを楽しんどうやし予想とは大分違うかったけど彼の成長を見守れて嬉しいわ。

それに来年には宮兄弟も来る。

彼と宮兄弟のコンビネーションと相性は最高やから更に今後が楽しみや。